

## 宇高は何であったか

小林 守（昭和三八年卒）

一〇年会該当年次にあたり、同窓会報に思い出を寄稿してくれと理事の福田さんから連絡があった。容易いご用であり、何かまとめておきたいとかねてから思っていたので、すぐに快諾した。ところがである。宇高（うたか）とは、私にとつて何だったのか、卒業五〇年もたつてしまふとその意味にまどまりがつかないのだった。卒業アルバムを見ながら思い出を引き出そうとしても、切れ切れの眩しい空模様になってしまふのだった。無意識下の心象に意味をさぐるには自動記述的なことしかあるまいと、細々の心象を書きだすことから作業が始まった。夢を思いだそうとするように、大儀さが先立った。

福田君が宇高の先生をしていたころの三八会で、「最近、鹿沼方面から宇高に來る生徒が本当に少ない、もっと送り出して欲しい」ということが気なっていた。政治家を辞め、鹿沼の教育長をやっていたころで、高校進学に対する地域や家庭や少年の志向が随分変わってしまったのだなと驚き、社会環境の変化に一種の諦めと、それでいいのかという変な危機感が入り混じっていたことを思い出す。

私が宇高を意識しだしたのは、小学校五・六年の時、担任だった鹿沼市上日向の神山登先生が、宇中出身であったことだ。県下の名門宇中・宇高の優れているところを、時に熱っぽく話してくれたりした。

神山先生は、スポーツ万能の先生で、石川啄木・若山牧水・土井晩翠などが好きでよく歌を板書などしたのを思い出す。授業時の記憶はほとんどない。でも私は中学校卒業後宇都宮高校に進学した。この村郷から戦後宇都宮高校に進学したのは初めて、と言われたことを思い出す。それが変な自尊心の温床にもなり、ふるさとのために、世のため人のために、何かしなければという使命感を持ったのも事実であった。その当時、高校進学は三〇%ぐらいではなかったろうか。戦後復興から高度成長の始まりの時期、農山村の社会環境はまだ貧しさや野性的な自然の遊びだけがいっぱいだったころである。宇都宮高校は、鹿沼の市街地から一〇数キロ西北の山村育ちの田舎秀才にはカルチャーショックとコンプレクス克服のたたかいの場だったと思う。英語のレベルの差に愕然としたことや、同級生の遊びや趣味や関心に家庭養育環境の格差に驚いたことなど、私にとっては苦闘の三年間だったと言えよう。既にそのようなわたしの位相に、都市青年の大人びた倦怠感を示す友だちもいた。文芸部長の同級生で、

中原中也の「汚れちまった悲しみに」を読ましてくれた友もいた。下宿の近く  
の同級生宅（医院のご子息）でシューベルトの未完成をいい音響のステレオで  
聞かせてくれたり、ベートーベンやモーツァルトの話などになると、憧れと驚  
きばかりだった。下宿させてもらった担任の石川速夫先生（一昨年逝去）の自  
宅が宇女高の正門のすぐ隣で、日曜日などは、拡声器で、メンデルスゾーンの  
VCやサラサーテのツゴイネルワイゼンなどが流れてくると、こんなにも美し  
く、いのちの輝きのような音楽があたりまえのようにあったのだと、憧れと悲  
しさがドーと私を襲ったものだ。

古文の授業では、芭蕉の名文「奥の細道」の冒頭部分の所で震えるような感  
動を受けた。

石川先生の授業であった。私は最初理系に関心を持っていたが、二年のころ  
から文系に傾き、倉田百三の「出家とその弟子」や「愛と認識との出発」現代  
国語で大学入試にもよく出るといふ小林秀雄・亀井勝一郎・太宰治などが愛読  
書だった。文化祭の弁論大会では「愛と認識との出発」をテーマにして、栃木  
会館でクラスを代表してやったことなどが蘇えってくる。ほか、水泳部や文芸  
部、生徒会活動など、心象のいろいろが恥かしく思い出され、照れくさい限り  
だ。私の精いっぱい二度とない青春だったのだが。

（元衆議院議員）